

バードリサーチ ニュース

Vol.1 No.2

2004. 10. 15.

Photo by Uchida Hiroshi

ヒクイナは何処に？ - 栃木県にみる ヒクイナの生息状況の悪化について - 平野 敏明

今から30数年前の夕方、学校から戻ると、栃木県黒磯市にある自宅の前の水田から「キョッ、キョッ」と聞きなれない鳴き声。そっと庭木の陰から覗いていると、1羽の赤褐色の鳥が草むらから歩いて出てきました。これが、ヒクイナとの初めての出会いでした。その後、1970年代後半に行なった宇都宮市郊外の鬼怒川でのセキレイの調査の際にも、ヒクイナの声や姿を頻繁に見かけましたし、足しげく通った奥日光戦場ヶ原でも朝夕によく声を聞いたものです。ところが、最近では実家の黒磯市付近や戦場ヶ原ではまったくヒクイナを見なくなってしまいました。

そこで、1995年の繁殖期に、栃木県内のヒクイナがいそうな場所で以前から鳥を観察している知人にアンケートを行なったところ、案の定、栃木県におけるヒクイナの生息状況が悪化していることがわかりました(平野ほか1997)。栃木県では1960年代から1980年代には少なくとも15か所でヒクイナが確認されていました。しかし、1995年と1996年の繁殖期にヒクイナを確認できたのは、このうちわずか3か所に過ぎませんでした。黒磯市では1970年代後半、戦場ヶ原では1980年代中ごろに観察されなくなりました。生息が確認されなくなった12か所のうち4か所では圃場整備が行なわれ、水路もU字溝に変わりました。また、3か所では河川改修工事や宅地開発で生息環境が消失しました。しかし、戦場ヶ原を含む5か所では環境の変化はありませんでした。

2002年、再びヒクイナの生息状況を調査してみました(平野ほか2003)。今回は、聞き取りに加え、ヒクイナのいそうな水田や湿地、河川などを早朝や夜間に訪れ、テープレコーダで鳴き声を流して反応するヒクイナを数えました。調査した県内の40か所のうち、ヒ

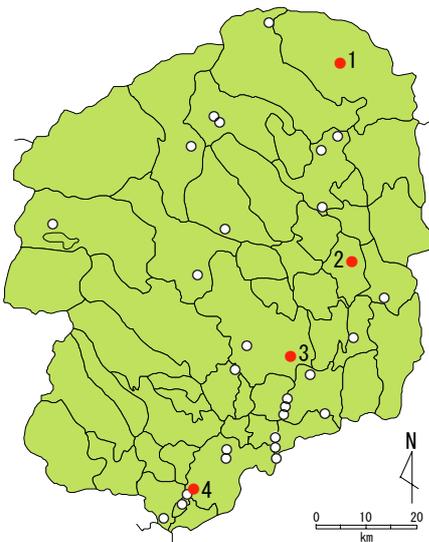


図. 栃木県における2002年のヒクイナの生息確認地点と調査地
赤●: 生息を確認した地点
白○: 生息を確認できなかった地点

クイナを確認できたのは那須町(図中1)、宇都宮市(3)、小山市(4)の3か所合計4羽のみでした。さらに聞き取り調査で、南那須町(2)で1羽が目撃されましたが、それをあわせても栃木県内で記録されたヒクイナはわずか5羽のみでした。



写真. 2004年のヒクイナの生息地(栃木県宇都宮市鶴田沼)

ヒクイナが減少した理由としては、宅地開発などによる生息環境の消失、農地の圃場整備・乾田化による餌動物の減少や草むらの消失とU字溝の設置などによる生息環境の悪化が考えられます。しかし、奥日光の戦場ヶ原や渡良瀬遊水地のように湿地環境が広大に残っている場所や、河川や農地の、みるからにヒクイナがいそうな環境がある場所でも、なぜか見られなくなっています。こうした、ヒクイナの減少は栃木県だけで起きているのでしょうか。栃木県の平野部は茨城県や埼玉県などと異なりハス田や溜池などヒクイナが生息する湿地が少ないようにも思われます。私の生まれ育った黒磯市も母によると水田が広がったのは昭和40年代以降だと言います。とすると、栃木県では一時的にヒクイナが生息するようになって、再び減少し始めたのでしょうか。

ヒクイナは、現在、環境省のレッドリストにも掲載されていません(環境省2002)。はたして、私が心配するようにヒクイナは日本の他の地域でも減少しているのでしょうか。それとも、栃木県という一部の地域だけにみられる現象なのでしょうか。繁殖期のヒクイナの情報をお持ちの方はぜひ、バードリサーチにご連絡ください。また、来年の繁殖期に、ヒクイナを探してみませんか。

嬉しいことに、今繁殖期は私の調査地の2か所でヒクイナを確認することができました(写真)。懐かしいヒクイナの声を聞きつつ思いました。ヒクイナの現状を調査し、早急に保護対策をとれば、今ならまだ間に合うかもしれない。

引用文献

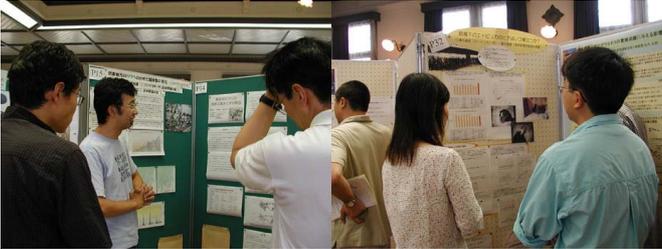
- 平野敏明・五反田薫・高松健比古. 1997. 栃木県におけるヒクイナの生息状況. *Accipiter* 3: 1-6.
- 平野敏明・君島昌夫・小堀政一郎・小堀脩男・志賀陽一. 2003. 栃木県におけるヒクイナの生息状況(2002). *Accipiter* 9: 1-9.
- 環境省(編). (2002), 改定・日本の絶滅のおそれのある野生生物 2鳥類. 財団法人自然環境研究センター, 東京.

学会情報

2004年度鳥学会大会 参加報告

9月17日から20日に、奈良女子大学において2004年度鳥学会大会が開かれました。口頭発表は65件、ポスター発表は71件、自由集会は12件あり、それぞれのテーマは鳥類相の変化や行動生態、形態、分類、生理、遺伝など多面に渡りました。シンポジウム「托卵鳥と宿主の相互進化」では、国内外の研究者による托卵研究の最先端が紹介されました。

一部の発表要旨は「日本鳥学会」のホームページから見ることができます。 <http://gi.ics.nara-wu.ac.jp/OSJ04/>



ポスター発表の風景(左、植田 右、嘱託研究員濱外)

● 口頭発表

銃で撃つべきか、ワナで捕らえるべきか—岩手県のカラス—
○藤岡正博(筑波大学生命環境学研究科)

調査期間3日という画期的(?)な発表がありました。藤岡正博さんは、異なる方法でカラスの有害鳥獣捕獲が行われている2つの地域において、カラスの人に対する警戒の程度を「調査者が接近できる距離」という指標で比較しました。

接近可能距離は、ワナによる捕獲を行っている地域よりも銃による捕獲を行っている地域の方が有意に遠く、銃の方が駆除できなかつたカラスへの威嚇効果が高いというお話でした。「お手軽調査—たった3日」と発表者自身がおっしゃっていましたが、仮説を立て、それに合わせて調査方法や場所を選定されているためにわかりやすい発表でした。

● 自由集会

カワウを通して野生生物と人との共存を考える(その7)
—カラーリングによる標識と参加型調査について考える—
企画者: 高木憲太郎・石田朗・須川恒・福田道雄

17日の自由集会は一つしかなく、そのためか、主催者側の予想を上回る約90名の参加者が集まりました。

私も演者の一人として発表しましたが、2時間で10人が入れ替わり立ち代り発表するという目まぐるしい集会でした。カワウの標識調査について、カラーリングを作ること、装着すること、見つけること、情報共有のシステムを作ることなどをテーマにそれぞれ立場の異なつ



た方たちの発表があり、面白かったです。中でも部分白化個体を追いかけることから、近畿のカワウの分布調査にまで発展していった奥田さんの発表は、「アマチュア研究者」の面目躍如たるものでした。

カワウの自由集会は今年で7回目ですが、昨年までのカワウの自由集会は、被害や保護管理といったやや重いテーマが続いていましたが、今年は少し違った方向から開催され、楽しいものになっていたのではないかと思います。

● セルフエクスカーション?(樫原神宮)

毎年各地で開かれる大会の折に、開催地近くにあるカワウのねぐらやコロニーを訪れています。今回は、シンポジウムをサボって、地元でカワウを調査している竹下さんの御案内で樫原神宮内のコロニーを視察してきました。

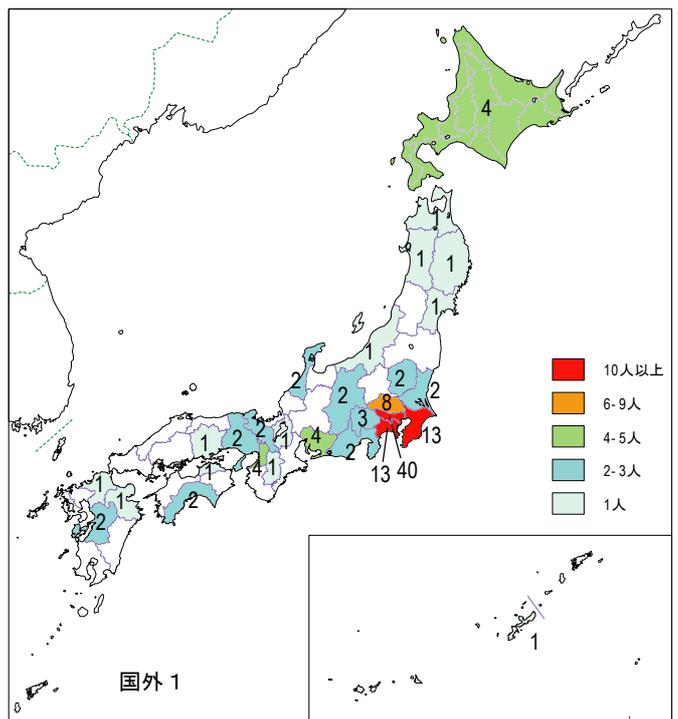
人との距離が近いのに、カワウがのんびりした様子に見えたのは、ねぐらが境内にあるためかもしれません。帰りには黒い鳥仲間の「八咫がらす」のお守りを購入しました。

【加藤ななえ】



会員情報

現在、バードリサーチは128人の会員に支えられています。会員の分布は今のところ図のように関東に集中していますが、これから関東地域以外での会員の参加が得られるように、活動をしていきたいと考えています。鳥の調査に興味のあるお知りあいがいましたら、ぜひ、バードリサーチをご紹介ください。



活動計画

バードリサーチ研究誌、原稿募集

バードリサーチの研究誌への投稿論文を募集します。研究誌はホームページなどを活用して、声が聞けたり動画が見られたり、論文には掲載することのできない生データを見られるようにするなど、今までにない形にしたいと思っています。現在企画を検討中です。

募集する原稿は鳥類の生態、保護などについての論文です。ある種の目撃の初記録のような論文については、関東地方などの地域の初記録については掲載しますが、〇〇県の初記録のようなものについては掲載しないことがあります。このような論文を書かれる場合は事前にお問い合わせ

わしてください。

原稿の書き方の詳細については投稿規程を参照下さい。
(http://www.bird-research.jp/1_newsletter/index.html)

はじめて論文を書く人にも丁寧な編集をしていきますので、はじめて論文を書く方の投稿も歓迎しています。また、「こんなデータがあるのだけど論文にすることはできるだろうか」など論文にする前の段階からのご相談にも応じます。お気軽に編集者の植田(mj-ueta@bird-research.jp)までご連絡ください。

たくさんの方の投稿・ご相談をお待ちしています。

セミナー情報

セミナーのお知らせ

日本鳥学会・国立科学博物館共催のセミナー「鳥の学校：論文を書こう！」に植田が協力することになりました。鳥学会の会員限定のセミナーで、非会員の方は入会しないと参加することができませんが、興味のある方は以下をお読みになった上で申し込み／お問い合わせください。

日本鳥学会 鳥学セミナー 第2回鳥の学校「論文を書こう！」

貴重な観察や発見を公表せずにお持ちではないでしょうか。また、研究のまとめ方がわからずにお困りではないでしょうか。観察や発見は学術雑誌に発表されてこそ記録として残り、後の研究に役立ちます。今回の鳥の学校は調査・分析の手法の習得よりも、論文を書き、学術雑誌に載せる力を養うことを目指します。目標は国内の雑誌に原著論文・短報・観察記録などを投稿し、掲載することです。論文を書きたいという皆様の参加をお待ちしています。このお知らせの最後にあるフォームにしたがって、申込先になるべく電子メールで(Fax, 郵便も可)申し込んで下さい。

主催: 日本鳥学会
共催: 国立科学博物館

対象: 日本鳥学会学会員で、論文をまったく、あるいはほとんど書いたことがないアマチュア研究者、または学生

※現在学会員ではないが参加したいという方は、開催までに入会をお願いします。
<http://www.soc.nii.ac.jp/osj/>

内容: 論文を書く意義、論文で書くべきこと・書いてはいけないことに関する講義／論文の批判的紹介・討論、(可能であれば)参加メンバーのデータや論文構想を提出してもらいそれについての討論／簡単なテーマを設定し、観察データを集め、統計的検定を行って、論文文化を意識した研究のしかたを実習

講師: 濱尾章二 (国立科学博物館附属自然教育園研究官, 論文発表・リジェクトとも経験豊富)
植田睦之 (NPO法人バードリサーチ代表, Strix編集者, 発表論文多数)

場所: 国立科学博物館附属自然教育園
(JR目黒駅から徒歩8分)
<http://www.ins.kahaku.go.jp/index.html>

日程: 2005年2月22日(火)～24日(木)

費用: 保険料(数100円の予定)

● 申し込み・問い合わせ先

濱尾章二
〒108-0071 東京都港区白金台5-21-5
国立科学博物館附属自然教育園
Tel 03-3441-7176, Fax 03-3441-7012
Email hamao@kahaku.go.jp

— 申し込みの際は以下のことをお知らせ下さい —

1. お名前
2. 所属(なければ結構です)
3. 連絡先住所
4. 電話番号・ファクス番号
5. 電子メールアドレス
6. 要望や質問(あればお願いします)

※「鳥の学校」は、研究の意欲はあるが調査や分析、論文化のしかたがよくわからないという会員を対象に、日本鳥学会(企画委員会)が各地で開催しているセミナーです。

活動報告

ロゴマークが決まりました！

バードリサーチをたくさんの方に知っていただき、親しんでいただけるよう、ロゴマークを作りました。

一般の方がイメージするような「ことり」で、シンプルなデザインをと漠然としたお願いしましたが、イラストレーターの重原美智子さんが私たちの意を汲んで素敵な作品を制作してくださいました。これから、いろんな場面で活躍します。どうぞ可愛がってください。



開設祝いを沢山いただきました！

事務所開設にあたって、森下強さん・英美子さんご夫妻から文房具セット、塚本洋三さんからOA複合機、菅原荘司さんから机、下重喜代さんからキャビネット、小川五郎さんから湯沸しポットを、高木真理子さんからは蛍光灯をいただきました。

また、宮坂麻子さん、八木典子さん、岩出淑子さん、吉家奈保美さん、NPO法人どうぶつたちの病院からお祝いの品をいただきました。

ありがとうございました。



事務所が決まりました！

バードリサーチの事務所が決まりました。日本野鳥の会鳥と緑の国際センター(WING)からほど近い、日野市のアパートを10月1日から借りています。京王線の特急が停まる高幡不動駅から徒歩6分。近くにお越しの際は、お立ち寄りください。



事務所の外観と仕事場の風景。狭いながらも・・・♪なかなか居心地の良い空間です。



高幡不動駅から事務所までの案内図

新人スタッフ紹介

研究員

野村浩子 Nomura Hiroko

大学1年のときに北海道の天売島に行って以来、波間に浮かぶその姿から海鳥にはまり、ウトウの巣立ちをテーマに研究していました。ウトウをはじめ、ウミスズメ科の鳥は巣立ったときの体重や日齢がヒナによって大きく異なることが知られています。陸の鳥に比べると、だいぶ大雑把というか融通がきくというか、とにかくフレキシブルで、そこが彼らの魅力のひとつだと感じています。

現在は、野鳥観察データベースの構築事業や全国的な鳥類の分布調査といった日本野鳥の会からの委託業務をおもにやっているので、野鳥の会の事務所にいることが多いですが、みなさまへの情報発信もしていけたらと思っています。

